The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Mrs. Henry Wood, East Lynne から伊原青々園「恋の闇」「子煩悩」への翻案 : 「新講話」という理想と限界
Author(s)	小橋, 玲治
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2017, 51, p. 21-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71396
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Mrs. Henry Wood, *East Lynne* から 伊原青々園「恋の闇」「子煩悩」への翻案

――「新講話」という理想と限界――

小 橋　玲 治

キーワード：*East Lynne*／伊原青々園／新講話／織田純一郎／ガヴァネス

はじめに

Mrs. Henry Wood（Ellen Wood, 1814-1887年）は、1860年代初頭からイギリスにおいて隆盛を極めたSensation Novelの代表的な作家として知られており、[1] 彼女の代表作である*East Lynne*（1860-61年）は、我が国においても明治期に翻案が二度なされた。日本語によって初めて*East Lynne*が世に出たのが、織田（旧姓・丹羽）純一郎訳による『いさ子』（阪上半七、1889年）である。周知のように、織田はEdward Bulwer-Lyttonの*Earnest Maltravers*（1837年）及び*Alice*（1838年）を、『花柳春話』（1878-79年）という一つの作品として発表した。彼が朝日新聞社から欧州に派遣された際に購入していた*East Lynne*を、舞台は欧州のまま、人物名のみ日本風にして発表したのが『いさ子』であった。この事実は柳田泉による指摘があり、平山鈴子も取り上げるところである。[2]

しかし、両者ともに若干間違って『いさ子』の紹介をしている箇所がある。それが織田の後に出た*East Lynne*の翻案である伊原青々園「子煩悩」の説明である。柳田は「この小説は確か、後に伊原青々園氏が翻案して「子煩悩」と題して、新聞か雑誌にのせ、大いに受けたことがあったように思う。」と述べており、おそらくそれを受けてであろうが、平山も「伊原青々園が後これを「子煩悩」と題し翻案した。」としている。だが、実際には「子煩悩」

は「恋の闇」の続編に当たるもので、両方そろって初めて*East Lynne*の翻案と言える。両氏とも織田に焦点を当てた論の中で「子煩悩」について言及したまでで、おそらくは現物を確認するまでには至らなかったのであろう。そのために、このような基本的な事実がこれまで見逃されてきたのであり、また、『花柳春話』の作者として現代でもしばしば言及される織田純一郎とは違い、伊原青々園の作品がこれまで等閑視されてきた証左でもある。[3)]

伊原青々園は現在でこそ演劇評論家としての評価のみが目立つが、明治期においては、黒岩涙香が去った後の「都新聞」にて自ら筆を執り、作品を発表していた「作家」でもあった。一時の凋落から何とか盛り返していた20世紀初頭の「都新聞」にあって、[4)] その主力の一人であった青々園は、ほぼ半世紀前に異国で発表された*East Lynne*を、地名も人物名も日本化し、「恋の闇」(「都新聞」1905年10月28日～1906年1月28日、全90回)、「子煩悩」(1906年6月23日～8月9日、全48回[5)])として同紙に発表したのである。

では、なぜ青々園は新聞連載小説として同作を選んだのであろうか。本稿では、『いさ子』についても参照しながら、新聞連載小説としての「恋の闇」「子煩悩」の有り様について検討していきたい。

1　織田の『いさ子』、青々園の「恋の闇」「子煩悩」という題名

具体的な検討に入る前に、*East Lynne*という作品自体について述べておきたい。*East Lynne*は当時のイギリスではよく見られた刊行形式である三冊分冊、全62章からなる長編である。その発表時から人気を獲得し、世紀転換期までその舞台化作品とともに人気は続いた。[6)] 織田は『いさ子』出版に際し、その例言にて「此書は昨一千八百八十八年英国出版のものにて」と述べているが、実際には初めて出版されたのは織田が入手するよりも三十年近くも前のことであり、出版三十年を経ても書店で容易に購入できたということがこの作品の同地での人気を証明してもいる。

梗概を記す。登場人物は多岐に渡るが、主人公であるLady Isabel、その夫

のArchibald Carlyle、そしてCarlyleに思いを寄せるBarbara Hare、この三人が主軸となって物語は進行する。没落貴族の娘であるLady Isabelは、階級ではせいぜいアッパーミドルクラスでしかないものの、放蕩癖のために散財した亡父から後事を託された有能な弁護士Archibald Carlyleと結婚する。元々は実家で、Carlyleが亡父より購入したEast Lynneの邸宅に居住、三人の子どもをもうける。

しかし、物語のもう一つの軸に当たる殺人事件の被疑者の妹であり、かねてよりCarlyleとは顔馴染みのBarbara Hareと夫との仲を疑い、その疑いを焚き付けたSir Francis LevisonとともにEast Lynneを出奔したことから彼女の人生は暗転する。Levisonにはフランスで捨てられ、彼との間に出来た子どもを列車事故で亡くし、自らも命は助かるものの、顔に大きな傷跡が残り、杖がなくては歩けないほどの重傷を負う。

この事故で死亡したとIsabelは思われ、そのために夫はBarbaraと再婚してしまう。我が子会いたさにIsabelは、顔貌が大きく変わってしまったことを利用し、governess、すなわち住込みの女性家庭教師としてEast Lynneに舞い戻る。ところが、長男が病重篤となる。熱心な看病も虚しく、ついに長男は息を引き取る。そして、自らも病に侵されたIsabelは、かつての夫に全てを打ち明け、亡くなっていく――これが*East Lynne*の大筋であるが、『いさ子』は訳者自身認めているように、前述の人物名や細かな誤訳などを除けばほぼ直訳である。一方、「恋の闇」「子煩悩」ではかなり異なっている部分も見られる。

日本における二つの翻案に共通しているのは、*East Lynne*という原題を踏襲していないことだ。まず、織田と青々園、それぞれの翻案の題名の付け方から、両者の違いについて考えてみたい。

Deborah Wynneが「Woodは自らのベストセラーを*East Lynne*と呼ぶことを選択したのであって、道徳からの逸脱とそれに苦しむヒロインにちなんで*Isabel Vane*としたのではないという重要な事実を、近年の批評では見逃しがちでもある。」[7]と述べているように、この作品につけられたのはEast Lynne[8]と

いう土地の名であった。すなわち、その土地の所有者が貴族階級にあるWilliam Vaneから中産階級である弁護士、Archibald Carlyleへと代わるということ、そしてやがては貴族階級の娘と結婚に至るという、階級の問題をこの作品が孕んでいることが、作品名自体によって暗示されている。

その意味では、織田がこの作品につけた『いさ子』という題名は、原作が本来持っていた意味を見落としているということになりはしないか。イギリス教養小説の嚆矢と言われ、主人公の名を冠した*Earnest Maltravers*を翻訳するに際して『花柳春話』なるタイトルを与えたのは他ならぬ織田その人であった。その織田が地名をタイトルとして与えられた作品に対しては、今度は日本でも例外的に早く人名を冠した作品として提示した、しかし、それによって作品の特質を見落としていることも同時に露呈してしまっている。

一方、伊原がこの作品に与えた名は「恋の闇」「子煩悩」であった。これもまた原題からは逸脱したものであるが、この題名からは、伊原がこの作品に何を見出していたかということが透けて見えもする。「恋の闇」からは男女間の恋愛の機微を、「子煩悩」からは、特に変装して元の家に戻ってきて後の田鶴子の「母親」という側面を重視していることが分かるであろう。先行研究でも*East Lynne*を母性Maternityという面から検討するものもあり[9]、その点では青々園の方が織田よりも本作の持っている特質を見抜いていたと言えるかもしれない。「仮面」としての家庭教師、そして本来の「母親」、この二つの立場の間で板挟みになっているのが本作の主人公なのである。

2 「探偵実話」から「新講話」へ――青々園の目論見

タイトルに続き、青々園による翻案の中身と原作とを読み比べていくとすぐに気がつくのは、物語の序盤の挿話の順序を原作と大きく変更している点である。原作では物語の冒頭、William VaneとCarlyleがEast Lynneという土地の所有について話し合うという、いささか退屈な場面から始まる。一方「恋の闇」では、物語のもう一つの主軸である殺人事件、すなわち、原作の第三

章に当たる部分から始まっている。この改変は何を意味するのか。ここには「都新聞」という「場」が占める意味合いが大きいであろう。先述したように、元々涙香が開拓し、探偵小説によって読者を獲得していったのが「都新聞」であった。原作もSensation Novelというジャンル名が示すように元々煽情的な意図を持って書かれた作品であるが、青々園はそれをより強調するために殺人事件から物語を始めるという工夫を施していると言えよう。

ここで注目したいのが、当時青々園は「都新聞」紙上で「新講話」という新たな落語や講談の形式を提唱していたという事実である。現代の読者からすれば、彼の提唱する「新講話」の新しさについては理解しがたいところもあるが、「恋の闇」連載の前に同紙上に掲げた、「吾ゲ都新聞に「新講話」を掲ぐるの趣意」（1905年5月2日）を、単行本化に際して「恋の闇」前篇の冒頭、そして「子煩悩」の最後にもわざわざ再掲している（「新講話を掲ぐるの趣意」に改題）ことからも、青々園が並々ならぬ決意を持って「新講話」に取り組んでいたことが分かる。[10)]

「新講話」を看板として掲げる以前の青々園が標榜していたのは、「探偵実話」であった。「探偵実話」は、涙香が去った後の「都新聞」にあって、読者をつなぎとめるために会社が刑事出身の高谷為之に書かせた、その名が示す通りの「実録物」であった。[11)]涙香が「萬朝報」を興した翌年、1893年には「日本初の拳銃強盗犯」として知られる人物をモデルとした『清水定吉』が出版されているが、この作者「無名氏」が高谷であった。その他、講談師であった松林伯知、松蔭舎稽照、錦城斎貞玉や、落語家の快楽亭ブラックらの口述筆記にも「探偵実話」と掲げられており、その活況は世紀転換期を中心に十年ほど続いた。青々園自身も、『欝金しごき』、『自転車お玉』（1901年）、『強盗士官』（1902年）を「探偵実話」という角書とともに刊行している。

こういった状況を踏まえると、「新講話」なる語句とは、涙香去りし後十年以上も掲げられた「探偵実話」から「都新聞」を解き放つため、青々園が新しく見出した「標語」という見方も出来よう。実際、上記趣意の中で青々園は、「探偵実話」も「新講話」の一形態であるとし、「新講話」を上位概念

に位置付けている。しかしながら、趣意の中で「吾々」という主語を用いているにもかかわらず、この「新講話」を「都新聞」内で使用していたのは青々園だけであった。「新講話」以降に「探偵実話」を名乗った作品は、「都新聞」の流れを汲む多田省軒が1909年に『桃山の地下室』を出し、後は1910年代、20年代にも散発的に出ている[12)]が、そこまで行くと最早「都新聞」とは関わりもなくなっているであろう。ゆえに、「都新聞」由来の「探偵実話」は多田あたりで終わりを告げていると言える。そして、興味深いことに、この『桃山の地下室』もまた、作者自身が冒頭で明らかにしているように、ロシアの作品が粉本であるらしいということだ。すなわち、「探偵実話」だろうが、「新講話」だろうが、いくら看板を挿げ替えていようと、外国種の作品から範を取っているということに関しては、やっていることは一緒ということになってしまう。

青々園が挙げる「新講話」の条件の一つに「新講話には日本種もあるべく、西洋種もあるべし。」とあるが、実際に「西洋種」ということが明らかになっているのは「恋の闇」「子煩悩」のみである。では、青々園が「新講話」なる造語まで作って、そして「西洋種」である*East Lynne*を翻案してまで読者に提示したかったものとは何であろうか。織田の『いさ子』も踏まえることで、両者の*East Lynne*観の違いについて考察したい。

そもそもなぜ織田は*East Lynne*を訳そうと考えたのだろうか。前述の例言において、織田は次のように述べている。「其結構主として一女子の運命に係るものなりと雖も、国会議員の選挙、裁判所の公判、貴族の驕奢、細民の貧困、兇徒の奸策、無辜の冤罪、男女の愛情等、列叙する所広大にして、而して人情の微を発し、世態の密を顕はすに至ては、実に人の意外に出で、且つ文章の巧妙、言語の艶麗なる 、近世稀なに見る所なり。」（下線は筆者による。以下同様）この作品の特徴として織田がまず挙げている「国会議員の選挙、裁判所の公判」の場面が実際に登場するのは、物語の終盤においてであり、にもかかわらずこれらについて最初に述べていることから、織田は*East Lynne*のこのような面を第一義としていたと考えられる。

ここに織田の翻訳に対する姿勢が絡んでいると言えよう。すなわち、十年前に訳した『花柳春話』の時とあまり動機に変化はなく、いみじくも柳田が述べているように「法律家経世家型の見方」で以て両作を捉えていたのである。織田の「人情の微を発し、世態の密を顕はす」なる文言は、坪内逍遥の『小説神髄』（1885～6年）中の「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」を明らかに意識している。織田にとって重要なのはイギリスの「世態」がどのようなものであるのか、いまだ発展の途上にある日本に紹介することにあったと言えよう。

一方、青々園はどのようにこの作品を捉えていたのであろうか。青々園も逍遥の教えこそ受けたことはないものの、実質的に逍遥の門下にある人物だった。「都新聞」への入社もそもそもは逍遥の仲介があったればこそであった。そのような青々園にしてみれば、同じく逍遥の言葉を借りるならば、やはり「小説の主脳は人情なり」というのが第一義であり、織田が最後に挙げた「男女の愛情」こそ、まさしく「恋の闇」「子煩悩」の中で主題にすべきと考えていたのではなかっただろうか。それは先述した、青々園自身がつけたタイトル自体にも表れている。

先述の趣意の中で、青々園は講談落語と絡め、この時点ではまだ戦時中であった日露戦争[13)]に言及している。

> 吾々の祖先ハ此の講談落語によつて趣味も養はるれバ道徳心も養はれたので特に今日まで日本人の血液に武士道といふ事が浸込んで現に此度の日露戦争に於て全世界を驚かすばかりの功績を樹てた其の半分ハ芝居、其の半分ハ講談の為めに感化せられた結果と申しても過言でハあるまいかと信じます、

このように、日本の勝利のその根本には、講談や落語によって感化された多数の日本国民の素養があると述べているにもかかわらず、「新講談」において「西洋種」を拾ってきた青々園の主意は那辺にあったのであろうか。ここ

で参照したいのが、「恋の闇」が始まる前に掲載された予告である。そこには「人情小説として面白きのみならず、人の妻たるべき女性たち、又其の夫たるべき男子たちハ此の物語によりて必ず其の身の教ともなるべきものがあらうと信じます」とあり、[14] この作品の読者に対し、教訓譚としても読むことを期待していたことがうかがえる。そして、それこそが青々園が考える「新講話」を「探偵実話」と分ける点ではないだろうか。では、日露戦争勝利後の日本にどのような教訓を与えるものとして青々園は*East Lynne*を解釈し、「恋の闇」「子煩悩」へと転化したのか。それを考える上での手順として、次節にて、「恋の闇」「子煩悩」において具体的に何を改変しているのか、確認したい。

3 「恋の闇」における主人公の性格の改変

特に前編の「恋の闇」において、*East Lynne*からどのような改変が見られるか、主人公の性格の面から考察してみたい。

基本的な物語の筋は「恋の闇」「子煩悩」を通して*East Lynne*を踏襲している。しかし、原作である*East Lynne*とはその過程において著しい差異が生じている箇所がある。それが出奔の部分である。以下、「恋の闇」でこの場面に当たる部分について、具体的に検討していきたい。

「恋の闇」でIsabelに当たる田鶴子は、Levison＝相良壽の讒言によって、Carlyle＝夫・花房謙三の下を離れてしまう。その大枠自体は同じであるが、その過程及びそれより生じる結果に大きな違いが見られる。田鶴子は出奔をし、確かに相良とともに大阪まで行きはするものの、二人の間に関係が生じていないことを紙一重ではあるが青々園の筆は保証している。

> 此処の離れ座敷を借切にして、無論田鶴子は別室に置き（後略）（「恋の闇」75回）

「否、良人に離縁される事ハ覚悟の前で御座います、（中略）然し妾が家出をしたのハ汝と淫らな事のあッたからだと世間に思はれてハ、妾それが一番無念に思ひます（同76回）

物語の中では新聞が報じ、夫もまたそれを事実と思い込んで即座に離縁の手続きに入るほど、田鶴子と相良の関係は確定事項となってしまっているが、これを小説として享受している読者に対しては、田鶴子の夫への貞操が守られていることが明らかにされているのである。

また、相良は田鶴子を籠絡しようと、「寧ろ世間で浮名を立てられた通り、謂ゆる嘘から出た実となッてハ何うです、既に謙三君も離縁を申込んだといへバ、汝は最早花房令夫人ではない、元の大河内伯爵の令嬢なんですから、改めて吾が輩と夫婦になッて此れから先き二人で幸福な新き生涯を始めようぢやありませんか」と巧みに説き伏せようとしても、「相良さん、其んな事ハ妾に何うしても出来ません、道ならぬ浮名を立てられたさへ妾にハ堪え難い恥辱と思ッて居ます、其れに道ならぬ事を実際に行ふといふ事は此の田鶴子に良心といふものゝある以上ハ到底御承諾をいたし兼ねます」と、頑として聞き入れない上に、田鶴子は相良が大阪まで自分をわざわざ連れてきて自分を説き落そうとした、その魂胆まで全て見通していたのである。

しかし、他ならぬ相良が「だッて其れは汝が無理です、其の明かしを立てる事が到底出来んといふぢやありませんか」（以上全て同76回）と述べているように、男女の間で実際に何が起こったのか、起こらなかったのかは、当事者同士でしか分からないことであり、いくら田鶴子が心から訴えたとしても、その証言は自身の操の証明にはならない。この展開を窃視者のように田鶴子や相良と共有している読者たちのみが、田鶴子が相良に心を許さなかったことを十分に理解しているのである。*East Lynne* においては二人が出奔した後すぐに時間も場所もかけ離れた位相に移動するため、その間に二人の間で具体的にどのようなやり取りがあったかは明らかにされない。ただ、赤ん坊がいるというその事実が、二人の間に関係が結ばれていたことを示唆して

おり、と同時にIsabelが夫のCarlyleを裏切ったということをも読者に提示している。

何度も田鶴子を言いくるめようとして尽く失敗に終わった相良は、ついに彼女の事を諦め、次のように言い放つ。

> 「成程、汝ハ意志の強い御方ぢや、否、思慮分別の明かな御婦人ぢや、如何にも此の相良ハ汝に対する野心を今夜かぎりサッパリと諦めてしまはう所詮汝のやうな賢婦人ハ吾が輩の相手ぢや無いのですからな、（後略）」（同77回）

田鶴子の貞操は田鶴子自身によって守られたが、それを裏打ちしているのが、彼女が「思慮分別の明かな」「賢婦人」であることだ。これは状況に翻弄されてしまいがちなIsabelとは異なる要素である。現在一番入手しやすい*East Lynne*の単行本はOxford World's Classics版であろうが、その泣き伏している女性の姿が描かれた表紙が示唆するように、Isabelのパブリック・イメージはまさに泣く女である。[15]すなわち、弱々しいという印象が先行していると言える。

Isabelと田鶴子の違いを示す場面は他にもある。父が亡くなった後、その膨大な借財の債権者たちがすぐに訪れる。Isabelはただただ途方に暮れ、終始Carlyleの庇護の下にある。[16]田鶴子の場合、債権者への対応はIsabelとは違っている。

> 「芳や、汝ハ其の箪笥を明けて、妾の着物を皆出しておくれ（中略）「青木、此の着物を玄関に待ッて居る人に遣ッておくれ」「ヘイ、其れハお姫さまのお召物を彼の債務の為めにお遣はしになるとの仰せにござります」田鶴子は大様に頷きました、（同22回）

自らの持ち物を放出してでも債権者と向き合おうとする意志が田鶴子にはあ

り、青々園は田鶴子にIsabelにはない要素を詰め込んでいる。

以上のように、何度も夫の素晴らしさを相良に提示する高潔さ、そして意志の強さなど、田鶴子は原作のIsabelの性格から改変されている。

だが、相良から「思慮分別の明かな」「賢婦人」とされた田鶴子であるが、本当にそうであればおかしな点がある。もし夫のことを真に思い、思慮分別を持っていたとすれば、そもそも相良の口車になど乗らなかったであろうということだ。田鶴子にはそれに反論するだけの根拠、すなわち、夫に自分以外の女性との不義があると思っていたのだが、それが田鶴子を手に入れたさの相良の嘘であるということを彼自身の口から伝えられたことで、田鶴子が夫に対して持っていた優位は根拠のないものとして瓦解する。しかし、田鶴子は気丈にも「妾ハ汝の為めに怖ろしい穽に落ちました、だが其れハ妾の不束な為めだと諦めて汝ハ恨みません」（同78回）と言う。この田鶴子の姿をIsabelと比較してみたい。IsabelはLevisonに捨てられそうになると、

> "Have you no pity for your child?"' she urged, in agitation. "Nothing can repair the injury, if you once suffer it to come upon him. He will be a by-word amidst men throughout his life." [17)]

と、Levisonとの間に出来た子どもをよすがに、離れて行くLevisonにすがろうとする。夫の庇護の下ではCarlyleに、Levisonの下では彼にすがるという選択肢しかIsabelには残されていない。男性の下では経済的に自立できない当時の女性の立場の弱さをも*East Lynne*は示しているが、これが後にMadame Vaneという変名で住込みの女性家庭教師として自給するというIsabelの新たな生き方につながっていると言えるだろう。だが、そこに至る道は、自身の子ども、そしてまた自らも負傷するという、大きな代償によって初めて開かれたものである。また、注目したいのは、その開かれた道が必ずしも自ら選び取ったものではないということだ。Isabelは何とかせねばならないとは思うものの、特に宛てもないまま列車に乗り、その列車がたまた

ま事故に遭った、いわば偶然の産物なのであり、Isabelが主体的に選んだ行動と言いかねるところがある。Isabelはあくまで状況に揺り動かされる存在としてしか描かれていない。

それでは田鶴子の場合はどうであろうか。田鶴子は相良に騙されたと知るや、毅然として相良を拒絶する。しかし、もはや夫や子どもたちの元には戻れないと覚悟を決めると、川に身を投げ、己の一生を閉じようとする（「恋の闇」79回）。たまたま通りかかった漁船に助けられるものの、川の毒素に当たって、熱にうなされ、その後遺症で顔に大きな痣が残ることになる（同80回）。このように、同じように顔に傷を得たIsabelと田鶴子ではあるが、結果は同じとはいえ、その過程は著しく異なる。その理由は、これまでの改変の経緯、すなわち田鶴子が意志のある女性として描かれたという点にあるだろう。自身の一生の幕を自らの手で降ろそうとした田鶴子に注目したい。そのような彼女なればこそ、偶然にも助かって後、自立するために住込みの女性家庭教師となるという展開も首肯できる。事故以前と事故以降の展開がご都合主義ではなく、無理なく繋がっていくのが、青々園の翻案の特徴と言える。田鶴子という女性を最初から意志を持った女性として設定することにより、その後の彼女の生き方にも説得力が生まれているのだ。

ここで考慮したいのが、花房家に舞い戻った田鶴子が得た「女性家庭教師」という地位である。先述したように、本来母親であるはずの田鶴子が元の家に帰ってくることが可能となるのも、「家庭教師」という職のおかげであるものの、そのせいで母親であることも明かせなくなってしまう。そのような展開を可能とする住込みの女性家庭教師という立ち位置は、この作品の中でどのように機能しているのだろうか。

4 「恋の闇」「子煩悩」における「家庭教師」としての田鶴子

*East Lynne*同様Sensation Novelを代表する作品、*Mrs. Audley's Secret*でも主人公がかつてその職にあったように、住込みの女性家庭教師――ガヴァネス

という存在は、Sensation Novelやミステリーといった、「秘密」を取り扱う作品と親和性が高いように考えられる。なぜならば、雇用された家庭が秘めていた事実を、家族でないにもかかわらず家庭に入っている人物が読者に対して暴露するという役割を担うのにうってつけなのがガヴァネスであるからだ。通常はミステリーというジャンルに入れられることのない*Jane Eyre*でも、自身を雇ったロチェスターの抱えていた秘密、すなわち、西インド諸島出身の狂人の妻を屋根裏に押込めているという事実を女性家庭教師が発見、そしてそれを読者に対して暴露するという点において、実はミステリーの要素を多分に含んでいるのであり、この暴露者としてジェインがガヴァネスであるという設定は必要なものであった。後年、「ミステリー」というジャンルが確固たるものとして定着した後も、コナン・ドイルの『シャーロック・ホームズの冒険』中の「ぶな屋敷」では、*Jane Eyre*同様、ガヴァネスが雇われた家の抱える秘密を暴露している。[18)]

そのような女性家庭教師の「定型」から翻って見れば、*East Lynne*中のガヴァネス、Madame Vaneが特異な存在であることが分かるであろう。彼女は実はその雇われた家庭の元の女主人であるIsabelなのであり、つまりは秘密を抱えているのは雇い主ではなく、雇われた側にあるのだ。この逆転現象が*East Lynne*には見られるのである。[19)]

しかしながら、今述べたようなことは、女性家庭教師が登場する作品群が多数存在していたことがすでに分かっている現代の研究から遡行しての観点であり、その設定を日本に置き換えている青々園がそれに気付いていたというものではない。結論から言えば、実際には青々園は「女性家庭教師」として田鶴子を書いている訳ではない。「淑女として相当な学校教育を受けて而も子持の経験があるだけ何処かの家庭に保姆に住込んで、此の世に生きて居るだけの天職を全うしたい」（「恋の闇」81回）とあるように、「相当な学校教育」を受けているという女性家庭教師としての条件は満たしているものの、青々園は田鶴子に「家庭教師」ではなく、「保姆」という職を与えている。表現の違いという意味以上に、その改変は雇用先での田鶴子の立ち位置を原

作から変えてしまっている。

それが如実に表れているのが挿絵であろう。「恋の闇」81回は、田鶴子改め柳澤歌子となり、身投げした自分を助けてくれた五造の紹介でまず雇われた家庭における田鶴子を描いたものだが、ここで田鶴子は幼子の乗った乳母車を押している。ここに象徴的に現われているように、「恋の闇」「子煩悩」の中では、田鶴子の職掌は、子どもたちへの教育係というよりは、子どもたちの世話係というような印象を読者に与える。それが原因であろう、本来女性家庭教師の仕事ではない作業に従事する田鶴子が他の場面にも見られる。同82回の挿絵では、まるで女中のように、井戸端で水を汲んでいる最中に立ち話をしている。本文中にはそのような描写自体存在しない。また、同88回では、これは本文中にも「ご飯のお給仕を妾が致しませう」とあり、実の子どもたちの食事中に給仕をしている場面が描かれている。[20)]

乳母は田鶴子とは別に存在している。にもかかわらず、ここではほとんど子どもたちの世話係として、そして、まるで女中として働いているようにも挿絵では見えるように、その地位は本来のガヴァネスが有していた地位よりも一等低くなっていると言えよう。しかし、そう改変することによって、原作よりも子どもたちとの距離が縮まっているという効果も生まれている。おそらく青々園にしても挿絵画家にしても、ガヴァネスという存在が、イギリスの家庭においてどのような地位を築いているものかまで把握しないままこの作品を手がけたと考えられる。ゆえに、使用人とほとんど変わらない立場として田鶴子を描いている。だが、その改変によって、かいがいしく子どもたちの世話を焼く田鶴子の姿が浮彫りになり、後編の「子煩悩」という題名にも説得力が生まれているという、予期せぬ効果を生みだしてもいるのである。

5　青々園による原作改変の意図

これまでの*East Lynne*から「恋の闇」「子煩悩」への改変の分析を踏まえ

た上で、青々園が「新講話」として提示したかった教訓とは一体何であったのだろうか。読者である女性たちに田鶴子のような意志を持った女性になってほしかったのだろうか。おそらくそうではない。日露戦争下での戦場では女性看護師が活躍し、また、国内では男性教員が兵士として徴収された欠員を女性教員が埋めたように、日露戦争とは、それまで男性の独壇場であった舞台で女性も活躍し得ることを十分に披露する機会ともなった。ゆえに、女性が自ら意志を持つことを奨励しているようにも一見思える。

だが、忘れてはならないのは、田鶴子は最終的には排除される運命にあるということだ。すなわち、田鶴子はあくまで使用人として陰からかつての自分の家族を見守るしか術が無く、最終的には病を得、そこからの退場を余儀なくされる。では、最終的に残ったのは誰か。それは後妻の夏子である。考えてみれば、秘密裏に殺人事件の捜査をしているという枷により、田鶴子と謙三の間には常に秘密があった。その秘密を共有しているのは、誰あろう、依頼者である夏子であった。この物語は最初から田鶴子と謙三との間に溝を作り、夏子と謙三との間には自由な往来を認めていたのである。

このような夏子と謙三との関係に見られるもの、それは、互いに隠し立てをしない夫婦の姿であり、これこそが青々園が第一義とした「男女の愛情」の結実ではないだろうか。田鶴子は主人公であり、物語は終始田鶴子を中心に回っているが、最後の最後で田鶴子が死という形で物語から強制的に退場させられることにより、幸福は夏子の元に転がり込む。最終場面では、夏子が継子を心のどこかで疎んじていたことを夫に告白し、心のうちに隠していた自らの思いを打ち明けている。これは田鶴子には決して出来ないことであった。意志の人であるはずの田鶴子には、夫への疑念を直接本人にぶつけるという意志はなかった。それがために彼女は自らの疑念に囚われ、悲劇へと陥った。一方、夏子はといえば、田鶴子という犠牲の上に立ち、自らの思いを打ち明けることが可能となったのである。[21)]

East Lynne の場合、作者が顔を出し、直接読者に語りかける箇所が何度かある。

> ああ、読者よ、我を信じたまえ。淑女、妻、母たる者たちよ。もしその嫁いだ家を捨て去るのであれば、必ずそなたは気付くであろう。たとえ結婚生活に災難多かれども、また、女の身で耐えられる範疇をそれらが越えていたとしても、あくまで耐え忍ぶ道を選択しなさい。もし堪えがたいのであれば、神の前に跪き、耐えられるように祈りなさい。悪魔に立ち向かう強さは必ずやそなたをそこから逃すであろう。そなたの名と良心を汚すよりは、死ぬまで耐え忍ぶがよい。もしも汚すのであれば、それは死をも凌駕する災厄であると気付くであろう。[22)]

自らを縛る家からの解放を冀う読者への戒めが並んでいる。この時、Isabelが*East Lynne*の中で果たす役割とは、家庭を裏切った者に待ち受ける未来像、つまり、このような境遇になってはならないという、悪い意味での手本である。その意味では*East Lynne*も「教訓的」と言えるかもしれない。にもかかわらず、*East Lynne*が人気を博した背景には、世の中に家庭への恨みを持つ女性たちの存在があり、Isabelの姿に己を仮託した女性読者たちが「涙」を以て彼女の存在を肯定したからである。[23)]

一方、「恋の闇」「子煩悩」では、作者が読者に直接語りかける場面は排除されている。そのため、田鶴子は原作で元々有していた機能を取り外された存在となっている。本来有していたスケープゴートという役割からは解放されたかもしれないが、最終的には排除される運命を田鶴子が担わされていることに変わりはない。

おわりに

前節で述べたように、*East Lynne*は読者、それも主に女性読者たちの、家庭からの解放という叶わぬ願いを仮託した物語であり、それゆえに主人公のIsabelは、ひたすら運命に翻弄されていく弱い存在として、同情を一身に受け続けるという機能を果たしている。

「恋の闇」「子煩悩」の田鶴子は、そのような弱い存在であることを拒否する、自らの意志を表に出す人物だ。しかし、そのように己の意志を示す女性を描くことを青々園が目的としていた訳では決してない。青々園の手のうちで最終的に勝ちを得る女性はBarbaraに当たる夏子である。彼女は最初から謙三との間に隠し立てをしない人物として設定されている。それが青々園にとっての理想の夫婦のあり方だったのではないだろうか。最終的に田鶴子は物語から消え、後には謙三と夏子という理想的な一組の夫婦が未来を志向して物語は幕を閉じているのである。

ただ、Sensation Novelであった原作に「新講話」をいわば接木したということは、作品自体に矛盾を孕んでしまっている。というのも、元々が読者の感情を煽る小説であったということと、理想的な夫婦像、家庭像を提示するというのとでは、やはりどうしても齟齬が露となってくる。「恋の闇」「子煩悩」という日本語の題名も、田鶴子の立場を示すものであって、夏子に即したものではない。とうの昔に去って行った、黒岩涙香という呪縛に囚われていた「都新聞」にあって、新たな機軸「新講話」を打ち出した青々園であるが、その理想を表現しようとして選んだ作品が「西洋種」、それもSensation Novelという特殊な位置にあるものであったことを見落としてしまっていたところに、青々園の実作者としての限界が見えてきはしないか。「新講話」を掲げながらも、涙香の作った道、そしてその埋め合わせであった「探偵実話」という既存の方向性からは外れることなく、むしろ積極的に加担していたことは、「恋の闇」が殺人事件から始まるように改変していることからも明らかであろう。高邁な理想の一方、その手段として用いた*East Lynne*という作品が内包していたものとの間にそもそも最初からずれがあったところから、「新講話」破綻はすでに始まっていたのである。

［注］

1） ほぼ同時期に発表されたWilkie Collinsの『白衣の女』*Woman in White*、Mrs. Elizabeth Braddonの『オードリー卿夫人の秘密』*Lady Audley's Secret*などが代表的なセンセーション・ノヴェルとされている。なお、*East Lynne*が発表当時どれほど人気を博したかを示す逸話として、1862年エジプト旅行の途次にあった後のエドワード七世が携え、愛読していたという事実がある。（Wynne, Deborah., *The sensation novel and the Victorian family magazine*. New York: Palgrave Macmillan, 2001, p.60）

2） 柳田泉「明治初期の翻訳文学」『明治文学研究 明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、1961年）。平山鈴子「織田純一郎評伝」（『学苑』250号、1960年）、及び『近代文学研究叢書』第18巻（昭和女子大学近代文化研究所、1962年）の「織田純一郎」の項。

3） 『近代文学研究叢書』第47巻（昭和女子大学近代文化研究所、1978年）で伊原青々園が取り上げられているものの、「恋の闇」「子煩悩」に関しては触れられてすらおらず、青々園の実作への関心の低さがうかがえる。また、「子煩悩」として舞台化、後に映画化もされたことが、「恋の闇」という題名が忘れられた理由の一つかもしれない。

4） 「都新聞」の浮沈に関しては、『都新聞史』（学術出版会、1991年）に詳しい。

5） 最終回は47回となっているが、途中で回数を間違い、修正された後また間違って、今度は修正されないまま終わっている。

6） 近年英語圏ではセンセーション・ノヴェルの研究が盛んに行われている。しかし、「世紀転換期までに百万以上のコピーが出回り、多くのヨーロッパの言語に訳され、果てはヒンディー語やグジャラート語にまで訳された。」（Tromp, Marlene., 'Mrs. Henry Wood, *East Lynne*.' In *A Companion to Sensation Fiction*. Gilbert, Pamela K. (ed.) Chichester: Wiley-Blackwel, 2011, p.257）と、イギリスの植民地であったインドでの受容にまでは言及されているが、非英語圏である日本にまで流入していた事実にまでは最新の研究においても言及されていない。

7） Wynne, *op.cit*., p.67

8） 本稿では、地名の場合はそのままで、作品名の場合はイタリックにて区別を図る。

9） Gruner, Elisabeth Rose., 'Plotting the Mother: Caroline Norton, Helen Huntington, and Isabel Vane.' In *Tulsa Studies in Women's Literature* 16/2, 1997 等。

10） ただし、「都新聞」そのものの中で「新講話」が浸透していたかどうかは疑わしい。「都新聞」において、作者を明らかにして「新講話」を掲げて小説を連載して

いたのは伊原青々園のみである。その青々園も、1908 年 10 月 21 日から 12 月 2 日まで連載した「続縁の糸」を最後に「新講話」を掲げることはなくなった。なお、書籍として刊行された『緑の糸』には『恋の闇』『子煩悩』とは違い、「新講話を掲ぐるの趣意」は掲載されていない。

11）元々は「探偵叢話」であった。高木健夫『新聞小説史　明治篇』（国書刊行会、1974 年）pp.239-241 に詳しい。

12）この中では、『逮捕する迄』（日本警察新聞社、1927 年）を出した松本泰が最も著名な作者であろう。

13）日本海海戦がこの月の 27 日、ポーツマス条約の締結が同年 9 月 5 日であった。

14）「都新聞」1905 年 10 月 7 日。同じものが 8 日、10 日にも掲載された。

15）Cvetkovich, Ann., *Mixed Feelings: Feminism, Mass Culture, and Victorian Sensationalism.* New Jersy: New Brunswick, 1992, p.99 を参照。前述のセンセーション・ノヴェルを代表する三作のうち、*East Lynne* を他の二作と決定的に分けるものがこの「涙」という要素であり、読者の主人公へのシンパシーの拠り所となっている。

16）Wood, Ellen., *East Lynne*. Oxford UP, 2008, chapter10

17）*Ibid*, p.287

18）ホームズの相棒であるワトソンの妻、メアリー・モースタンも、『四つの署名』の依頼者にして女性家庭教師であった。ただし、作中では雇用されているフォレスター家の秘密を暴露するという訳ではない。

19）日本のミステリーの中でもガヴァネスと同様の機能を有する職がある。それが「家政婦」である。市原悦子演じる家政婦でよく知られるドラマ『家政婦は見た！』であるが、実はその大元は松本清張原作の『熱い空気』であり、最近になってそちらを基として米倉涼子主演でドラマ化もされている（『松本清張没後 20 年ドラマスペシャル　熱い空気』2012 年 12 月 22 日）。市原悦子の方は完全に雇われた家の秘密の暴露者に徹しているが、米倉版では、米倉の方にも過去に結婚に関して何かあったかのような描写がなされている。『家政婦は見た！』の要素を反転し、雇われた家が抱える問題よりも、むしろ雇われた側の秘密が徐々に明らかになっていくというところに視聴者の興味を惹き付けたドラマが『家政婦のミタ』（2011 年）である。*East Lynne* と『家政婦のミタ』は、「定石」を反転しているという点で近いものがある。しかしながら、*East Lynne* はそのような「定石」が醸成されていく過渡期の作品であり、狙ってそうした訳ではあるまい。

20）Maid との仕事の違いは、イギリスの小説では明確に分けられる。Wadsö-Lecaros, Cecilia., *The Victorian Governess Novel*. Lund UP, 2001 参照。

21）家庭の中において秘密がなくなるという点が、物語の最後に秘密がなくなるという意味でミステリーの手法と同様であると、大久保譲氏からご教示いただいた。

22）Wood, *op. cit.*, p.283. 日本語訳は筆者による。

23）E. ショーウォルター、川本静子・岡村直美・鷲見八重子・窪田憲子共訳『女性自身の文学』（みすず書房、1993 年）154 頁参照。

（文学研究科助教）

SUMMARY

On the Adaptation of *East Lynne* by Mrs. Henry Wood into *Koi no Yami* and *Ko-Bonnō* by Ihara Seiseien: The Ideal and the Limitation in Shin-Kōwa

Reiji Kohashi

Ihara Seiseien（伊原青々園）, a *Miyako Shimbun* journalist, adapted *East Lynne* (1861-1862), by Mrs. Henry Wood (Ellen Wood), from 1905 to 1906. *East Lynne* was a representative sensation novel, a literary style that prospered in the British Empire during the 1860s. Seiseien adapted *East Lynne* during the Meiji era and serialized it in *Miyako Shimbun*. The slogan he used at that time was 'Shin-kōwa' or 'New Lecture'. According to Seiseien, the 'Shin-kōwa' should have been a lesson for the Japanese after the Russo-Japanese War. What was the lesson that Seiseien took and adapted from *East Lynne*?

This paper focuses on the first adaptation of *East Lynne* in Japan by Oda Junichiro, called *Isako* (1889). An analysis will be made to understand the differences between Seiseien and Oda. This methodology will clarify what the aforementioned lesson was. Furthermore, an analysis will be made regarding the change of the protagonist character by Seiseien and his misunderstanding the concept of 'governess'. Based on these considerations, this paper will clarify the 'ideal' and also the 'limitation' of 'Shin-kōwa' as seen through Seiseien's adaptation of *East Lynne*.